

阪神・淡路大震災における 「養護施設 明星寮」の被災からの再建

藤原伸夫

Reconstruction of a child care institution “MEISEI RYO” damaged
by the Great Hanshin-Awaji earthquake

Nobuo FUJIWARA

要 旨

阪神・淡路大震災による被害は甚大なものであったが、児童福祉施設においても同様である。本論で取り上げた長田区の児童養護施設「長田こどもホーム」は、当時「明星寮」といい、建物の被害は半壊扱いとなっているが、施設機能全廃により現地建て替えを行った施設である。震災後、児童は措置変更により4カ所の施設に離れ離れで暮らすことになるが、児童と職員のもう一度みんなと一緒に暮らしたいという思いを、社会福祉法人の当時の理事長、施設長等の尽力により、行政への働きかけ、世論への喚起もあり、わずか11ヶ月で再建を実現させた。絶望的な難問題を、施設の理念と基本方針をもって解決したといえる事例を紹介した。

キーワード：阪神・淡路大震災、児童養護施設、措置変更

はじめに

阪神・淡路大震災による社会福祉施設の被害は甚大なものであった。当時、市内13ヶ所あった養護施設（以下現行の児童養護施設と表す）のうち2施設が半壊となった。そのうち、全面建て替えを行った施設がある。「明星寮」である。しかも、再建事業の完了は2年程かかっているが、1年を経たずして離れ離れになった児童を再び呼び戻している。驚くべき速さである。災害が起こるたびに、一日も早い復旧・復興が叫ばれているが、スピード感を持って臨んでいるとは言い難い。「明星寮」のような迅速な対応ができたのはなぜか、この事例を通し経過を明らかにしたい。

1. 「社会福祉法人 明星寮」について

社会福祉法人 明星寮の概要は、以下の通りである。

所在地：兵庫県神戸市長田区前原町1丁目21-18

設立年月日：1949（昭和24）年8月2日

法人格取得年月日：1952（昭和27）年5月26日

「長田こどもホーム」のホームページ^(注1)によると、前身は大正15年2月、兵庫区正覚寺内に、山森住職によって司法保護施設洗心学院を創設したのが始まりとされている。昭和3年2月に児童保護施設に改め、昭和6年2月に名称を「明星寮」としている。昭和20年3月の神戸大空襲の戦災により一時、飾磨郡的形町（現姫路市）に疎開したが、昭和22年6月、現在地である神戸市長田区前原町において戦災孤児保

護事業を開始した。昭和24年8月に児童福祉施設（児童養護施設）として認可されている。

その後、平成2年4月に神戸市子育てリフレッシュステイ事業を開始しているが、平成7年1月の阪神・淡路大震災により施設は全壊した。後で詳しく述べるが、児童は、神戸市内の4か所の児童養護施設に分かれての生活を余儀なくされた。そして、施設再建の努力の結果、平成9年3月の全工事完成とともに、施設名を「長田こどもホーム」と改め、新たなスタートを切っている。定員は60名から48名に縮小しているが、平成20年4月には、定員を42名として現在に至っている。

理念は「寄り添い育つ」として、

「私たちは、創設者の想いを受け継ぎ、つねにこどもに寄り添い、ともに成長しつづけます。

そして、こどもを含む家族、関係機関、地域と協働し、こどもにとって何が大切かを、第一に考え支援に努めます。」^(注2)を掲げている。

そして基本方針として

- ・こども達ひとり一人と丁寧に向き合い、ありのままを受け入れ「愛されている」事を実感できる支援に取り組む。
- ・「安全」な環境のもと、こどもが「安心」して過ごせる居場所作りと、自立に向け、社会に適応できる支援に取り組む。
- ・地域から信頼され、地域支援の一翼を担えるよう、職員の資質の向上・人材育成に取り組む。
- ・定款に定める「経営の原則」に沿った運営の実践に努め、関係の法令や通達を遵守し、法人の活力に繋がる経営に取り組む。

以上のような4点^(注3)が掲げられている。

2. 阪神・淡路大震災発生、その時

1995（平成7）年1月17日（火）、午前5時46分。

その時、児童養護施設 明星寮には男子児童33名、女子児童14名、計47名の入所者と3名の職員がいた。地震発生と同時に施設北側に隣接する高さ約8メートルの石垣とその上に建っていた家屋が崩れ落ち、児童寮本館の調理場・浴室・食堂・児童居室の一部と、調理員室・倉庫が全壊する。本館の集会室・学習室、また全壊を免れた残りの児童居室等も、地割れで損壊が甚大で、全館にわたり使用不能となっている。なお地震発生時、本館から少し離れた事務棟は、比較的被害が少なかったが、21日後の2月7日朝、事務棟に隣接する石垣も崩れたため損壊して、施設機能全廃となっている。

地震直後の動きであるが、児童・職員は各居室から脱出し、事務所前の広場に集合、安否確認を行っている。その後、暗闇の中、靴を取り出している。被災された児童の一部は裸足で避難した者もあり、何よりもまず靴を履くことが求められたようである。それと同時に毛布を取り出し、着の身着のまま脱出した児童は、毛布にくるまり寒さをしのいでいる。地震発生時は、雨こそ降っていなかったものの、明け方の冷えが厳しい時間帯であった。

その後、施設内にあった・おにぎり・ウインナー・お菓子等を取り出し、とりあえずの飢えをしのいでいる。調理せずにそのまま食べられる物があるということは、どんな物でもありがたく思われたものである。その日の夜は、すぐ近くの兵庫高校（避難所）の3階の理科室に避難している。明星寮近くの、兵庫高校（長田区寺池町）と室内小学校（長田区前原町）は避難所として、周辺の被災者が数多く避難してきており、大混乱の状態であった。筆者は、翌々日の19日に、当時勤務していた施設の園児・保護者の安否確認のため兵庫高校を訪れているが、絶え間なく続く余震と、震災により発生した大火災への恐怖と、寒

さと飢えて、被災者は茫然自失状態であった。教室に入りきれず、コンクリートの廊下に座り込んで過ごす人もあったほどである。その時の筆者は、明星寮の皆が3階に避難していることは知る由もなかった。狭い教室とはいえ、明星寮の皆と一緒にいられる場所が確保できたことは、学校側の温かい配慮だった。

明星寮の職員からの聞き取りでは、入所児童が湊川高校（兵庫高校に併設の定時制高校）に通学していた関係で、日頃から繋がりがあったことも関係しているとのこと。損得勘定を抜きにした、普段からの地域とお付き合いの大切さがよくいわれるが、いざという時に頼りになるのは、やはり身近な地域であろう。

その日配られたバナナを幼児さん優先に1本を2人で分けて食べた記録にある^(注4)。そして、真っ暗な教室で施設から取り出した毛布にくるまって一夜を過ごしている。

阪神・淡路大震災後も、日本各地で震災が起きているが、その後各地の避難所の開設・運営を見聞し、当時の避難所の大混乱を比較すると、阪神・淡路大震災の教訓が生かされているのではないかと感じる。

図1. 震災前の「明星寮」正門付近
(1991年11月16日撮影)



写真提供：社会福祉法人 明星寮

図2. 被災直後の「明星寮」正門付近
(1995年1月17日撮影)



写真提供：社会福祉法人 明星寮

*正門前に不安そうに立つ子どもたち。塀が崩れ、写真右上（施設より南西方向）、火災による煙が立ち上っている（長田区の大火災）。

3. 避難所生活から他施設への措置変更

明星寮の児童は、被災後しばらくの間、兵庫高校で避難所生活を送っている。

1月28日（土）、卒業間近の高校生等を残して、33名の児童が担当の保育士とともに神戸市内3か所の児童養護施設へ措置変更となっている。措置変更先は、兵庫区馬場町の「愛信学園」に11名、北区淡河町の「天王谷学園」に15名、垂水区塩屋町の「神戸少年の町」に7名である。（なお1名は、身体的理由により虚弱児施設に措置変更されている）

事務棟が損壊し、施設機能が全廃した2月7日（火）、残りの児童13名とともに、神戸市中央区中山手通にある児童養護施設「神戸真生塾」の施設の一部を借りて、仮設明星寮として生活を再開した。このように、市内4か所に分散しての生活は、児童にとって新たな負担を強いることになったかもしれないが、一日も早く安心して生活できる場の確保をと、神戸市児童相談所や神戸市児童養護施設連盟の調整・協力等によって実現したものである。とりわけ自身の施設も被災しているなか、快く受け入れを引き受けた各施設の理解の賜物である。

この時期（震災後2週目の緊急対応期1月24日～1月31日）、神戸市児童相談所の報告^(注5)によると、全半壊した「明星寮」と「信愛学園・御影乳児院」（神戸市東灘区御影町3丁目）への支援として避難所生活を強いられている児童らに対して、温かいスープ等副食品をバイクなどで届けている。また、弾力的対応として市内他施設への措置変更を行ったとの記載がある。震災後2週目ともなると、避難所生活の長期化により、被災した障害児が避難所でパニックを起こす等、環境不適應に対処することや、医療的配慮の必要な重度障害児の受け入れも可能とする、いわゆる二次的避難所（今日の福祉避難所）のニーズの増大を想定していた。丁度、公立通園施設の職員が中心となり「障害児（者）緊急ケアセンター」（以下障害者緊急ケアセンターと表す）の開設準備に追われていた頃である。

障害児者緊急ケアセンターの活動報告の詳細については、別の機会に譲るが、少し触れておくと、障害者緊急ケアセンターは1月30日に、北区山田町下谷上にある「しあわせの村」内の施設を借りて開設した。スタッフとして神戸市児童相談所からも、一時保護所の指導員・保育士・看護師の応援を受けている。しかし実際のところ、障害児の保護依頼の相談は思ったより少なかった。多くの障害児を抱えた家族は、親族・知人等を頼って市外・県外へ疎開するか、周囲に遠慮せず過ごせるという理由で、避難所から再び自宅に戻ったケースもあった。障害者緊急ケアセンターは北区にあり、住み慣れたところから離れることに抵抗があったのではないかと考える。特に、夜は避難所で過ごす、日中は自宅に戻って家財道具の片づけや、金融機関等公共機関での手続きを要する人も多く、震災を振り返ると、障害者緊急ケアセンターのような福祉避難所は、より身近なところでの拠点づくりが求められる。

また、市内に留まった障害児を抱える家族は、神戸市児童相談所の報告書にも、「神戸に止まった家族は地震のショックで親子の凝集力があえて強まり施設利用に抵抗があったためか、我々の予想に反し保護依頼の相談は少なかったといえる。」^(注6)とある。これは当時、肢体不自由児通園施設の施設長をしていた筆者も、震災直後の安否確認で市内を自転車で回ったが、園児宅や避難所を家庭訪問していて強く感じたことである。特に母親は、他の兄弟姉妹を抱えている家庭も多くあり、子どもたちと一時も離れたくない、子どもたちも一瞬たりともお母さんと離れたくないという心理が、双方に強く働いていたと記憶している。避難所や自宅において、母親の姿が見えないと不安に駆られ泣き出す子どもたちは、障害があるなしには関係なくよく見られた光景であった。不思議なことに、子どもが父親を追い求める姿は見えてこなかった。

保護者から「死にたい」という言葉は直接聞かなかったが、余震に対する恐怖が続く中、身近なところで多くの死傷者が出ている状況にあって、もしもの時、家族と離れて死傷するよりは、同じ死傷するならば家族と一緒にといったような話をされる方々があり、皆ギリギリのところまで追いつめられていた。

4. 施設再建に向けた取り組み

1月下旬、明星寮の児童たちが、神戸市内3か所の児童養護施設へ分かれて暮らすことになるのだが、当時これをマスコミが大きく取り上げ、「大地震の爪跡 施設の子供・兄弟 涙の別れ」というタイトルでテレビ報道され、被災地のみならず、全国規模で、いつ再会できるのだろうかかと視聴者に大きな反響を呼んだことも、再建を早めた要因の一つである。特に3人の兄弟が明星寮と一緒に入所していたが、震災により中学2年の兄はA施設へ、小学6年の妹はB施設へ、小学1年の弟はC施設へと、離れ離れになって生活することになった。児童だけでなく保育士等職員も家族同様の思いで接しており、皆で「早く一緒に暮らしたい」という思いの中、マイクロバスで明星寮を去っていく別れのシーンは、視聴者に強いインパクトを与えた。

番組の中でも、施設の再建について3年はかかるであろうと報道されており、当時の神戸市街の被災状

況からすれば、復旧・復興の目途もたたず、本当のところ絶望に近いものがあつたであろう。

この施設再建の経過について、もう少し詳しく見ていくと次のようなものである^(注7)。

一時は、措置変更先の、各々がお世話になっている施設で暮らし続けようという考えもあつたようだが、そうすると「明星寮」がこのまま消えてなくなってしまう。もう一度、離れ離れになった皆と一緒に暮らしたいという児童の思いが強く、また、職員もその思いを叶えたいという突き動かされるものがあつたようである。

1995（平成7）年2月22日、社会福祉法人明星寮は、避難先である神戸真生塾において緊急理事会を開いている。第一号議案、被災状況の報告と、第二号議案が明星寮再建計画についてである。この度の被災により、市内の施設に分散生活を余儀なく強いられた措置児童の元の生活の安定を図ることが急務であるとともに、被災後の神戸市における要保護ニーズに応えるために再建は必須であると判断し、被災時と同じ60名定員規模による再建案を立てて、市と協議することを確認している。

その後、再建事業として次のような経過をたどることとなる。2月の緊急理事会と前後して、神戸市へは「社会福祉施設災害復旧国庫負担金（補助）協議書」を提出している。施設の設計監理は民間の会社に委託して、3月の理事会において、具体的な建物の規模・配置を決定している。また3月には明星寮の建物の解体が行われ、翌4月には「平成7年度災害復旧事業」として施設再建が承認されている。

4月初旬には施設建設工事の入札を行い、建設業者を決定し、市へ工事見積書提出している。この4月中に現存の建物の解体を終わらせ、直ちに業者による土質調査を実施し、5月1日正式に建設業者と工事契約を締結している。このような経過を見ると、緊急理事会開催から約2か月余りでの動きであり、当時の建設業者不足・人手不足・機材不足・資材不足等々の中にあつて、他に類を見ないほどのスピード感を持って再建計画が進められていたことが分かる。入所児童や職員の再会への願いを、当時の理事長、施設長等法人関係者が汲み取り、再建への思いが一つとなり、強く突き動かした結果である。

マスコミに取り上げられ、周囲の施設再建への期待もあり、5月に業者との工事契約の締結の他、神戸市と正式に災害復旧国庫補助協議書を確認している。6月には当時の厚生省と大蔵省の国庫補助ヒアリングを経て、7月に物品関係分4,644千円の国庫補助の内示を受けている。また前後するが、6月には再建工事が開始されている。

5. 土地を分割しての再建

ここで、明星寮に隣接する神戸母子寮（現ライオンズファミリーホーム）のことに少し触れておきたい。震災時兵庫区にあつた母子寮（現母子生活支援施設）、神戸母子寮も全壊したことにより、移転再建先として明星寮の土地に分割使用の話が浮上した。元来、明星寮の土地は神戸市の所有地であつたため、土地を分割してそれぞれ再建を図ることとなる。神戸母子寮の方は、その後、社会福祉法人神戸福祉会として認可を得て、平成9年1月に現在の「ライオンズファミリーホーム」と名称を変え前原町で再出発している。以前の明星寮時代を知る人が、現在の長田こどもホームが手狭であると感じるのは、このような理由によるためである。

有効面積2811.4㎡の土地を、明星寮1810.12㎡、神戸母子寮1001.28㎡に分割している。元の広さから比べれば約64%の土地での再建となっている。それでも建物延面積は、明星寮時代は764.41㎡であつたものが、長田こどもホームとしての再建時は、1084.9㎡と拡大している。

限られた敷地の中での再建となったが、12月4日には第一期工事の児童棟4棟の引き渡しを受けている。12月25日には、児童棟の一部に事務所を設け、同月27日までに待ちに待った、分散施設からの児童全員復帰を実現させている。そして、再建した明星寮で平成8年の新年を迎えている。愛信学園、天王谷学

図3. 現在の「長田こどもホーム」正門付近



筆者撮影

る。そのうち建築工事費は、約2億3,824万円である。災害復旧事業費財源の内訳であるが、約3億1,421万円のうち、補助金が約1億7,380万円、中央競馬馬主社会福祉財団助成金が、6,516万円、施設負担金が約7,525万円である。

6. 児童の心のケア

阪神・淡路大震災による児童の心のケアについては、多くの研究が報告されているが、服部・山田(1999)^(注8)によると、PTSDと診断される子どもは、欧米での調査と比較すると極めて少ないと述べている。地震後のストレス反応調査で、欧米では1年半が経過しても10%の子どもがPTSDと診断されているが、阪神・淡路大震災では1%程度であるとの報告である。

これは、地震発生時刻が午前5時46分という、まだ家族が一つ屋根の下で寝静まっている時であり、親子が同室で就寝する、いわゆる川の字文化という日本の就寝形態が、子どもの震災への恐怖を和らげたのではないかと指摘している。

服部(1997)の西宮市の小学校の保護者に対するアンケート調査では、震災発生時9割の子どもが、親またはきょうだいと同じ部屋にいたという結果が出ている。震災直後、家族がお互い声をかけあって安否を気遣ったことは容易に想像できる。

筆者の場合においても、当時小学4年生の長男と、保育所年長組の次男と同室で就寝していた。地震発生時、激しい揺れの中で配偶者(子どもにとっては母親)は、とっさに次男の布団の上に覆いかぶさり、物が落ちてくるのを必死に防いだ。次男は、何が起こったのか分からないまま、ただ、「いきなりお母さんが布団の上に乗ってきて重かった。」と話している。

この考え方から、さらに服部・山田(1999)^(注9)はこのような家族と一緒に暮らせない子ども、具体的には児童養護施設の子どものたちの震災ストレスはかなり強かったのではないかと仮説を立て、ストレス調査を実施し報告している。西宮市の子どもたちと比較しているが、児童養護施設の子どものたちは、震災9か月後においてもなお、ストレス反応3成分である、不安反応、うつ反応、混乱反応いずれの得点も西宮市の子どもたちよりも高かったという結果を得ている。

明星寮が震災一年後の1996(平成8年)1月に入所児童に対して行った自由筆記のアンケート^(注10)でも「目がさめた時、一番最初に考えたことを教えてください。」や「被害を受けた明星寮や周りの家々の様子を見てどう思いましたか。」の問いに、男女とも「こわかった」と回答した児童が多かった。施設職

園、神戸少年の町、神戸真生塾から帰寮した児童や職員の感慨は一言では語り尽せないであろう。

翌1996(平成8)年4月に第二期工事として、食堂棟・浴室・事務所棟の工事にかかっている。食堂棟及び浴室は同年8月に完成しているが、事務所棟・外構工事は1997(平成9)年2月完成であった。これをもって再建事業は終了し、先にも述べた、1997(平成9)年3月12日に竣工式を執り行い、同日より施設の名称を「明星寮」から「長田こどもホーム」と改称した。

なお、経費面を見てみると、災害復旧工事費の総額は、補助対象外となった崖崩れの擁壁外構工事費約3,836万円も含めて約3億1,421万円かかっている。

員はまた被災者でもあったが、施設の子どもたちの心のケアも含めた安心安全な生活の確保を最優先に苦労されたことは、想像に難くない。

「平成7年12月27日まで生活した施設での思い出を教えてください。」の問いかけには楽しかったことや嫌なこともあった等、様々な意見が寄せられているが、肩身が狭かった、早く明星寮に帰りたいといった意見もあり、「新しい明星寮を見た時、どのように感じましたか。」の問いに、きれい、やっともどってこられた、うれしかった等、肯定的な意見が多かった。

それでも「今、一番心配なことはなんですか。(平成8年1月現在)」の問いに対して、男子の12人、女子1人が「なし」と答えているが一方で、男子4人、女子7人が、「又、大きな地震が来ないか心配。」と回答しており、震災への不安がなおも強いことが窺える。

7. 他施設の被害状況

ここまで、明星寮を中心に述べてきたが、神戸市内の他の児童養護施設の被害状況について触れておきたい。神戸市の資料^(注11)では、信愛学園(東灘区御影)が旧館と新館の接合部分の破損等、特に旧館部分の損壊が激しく、明星寮同様「半壊」となっている。他に内外壁のひび割れ等による一部損壊が、いずれも灘区にある2施設、同朋学園(灘区篠原北町)、愛神愛隣舎(灘区泉通)となっている。神戸市で死者数の多かった区は、東灘区、灘区、長田区の順であるが、当然のこととはいえ施設の損壊は、やはり被害の大きかった区に集中している。なお阪神・淡路大震災全体では死者6,402人のうち、東灘区1,471人、西宮市1,126人、灘区933人、長田区919人の順である。

児童福祉施設関係では、乳児院や、母子寮(現母子生活支援施設)、教護施設(現児童自立支援施設)、心身障害児(者)施設、保育所、児童館等、ほとんどの施設が被害を受けている。特に保育所は、市内158施設中、全壊5施設、半壊4施設、一部損壊123施設となっている。

震災直後の児童養護施設等の状況はどのようであったか、詳しい資料はないが、神戸市児童相談所の報告の「小児科医療チーム派遣」^(注12)の活動の中に当時の様子を窺い知ることができる。それは、次のようなものである。

神戸市児童相談所では、児童養護施設や乳児院の児童の健康面への支援として、児童相談所嘱託医、神戸大学医学部の高田医師を中心として、地震から6日後の1月23日より巡回による診療を開始している。1月23日は、一時保護所の児童の避難先である神戸実業学院(兵庫区平野町天王谷)と、同朋学園(灘区篠原北町)へ巡回診療を行っている。両施設とも児童の笑顔が印象的であったと報告されている。23日の夕刻には、神戸真生塾・真生乳児院(中央区中山手通)を訪問されている。ここには、東灘区から建物に大きな被害を受けた信愛学園・御影乳児院(東灘区御影)の児童がそれぞれ避難していた。

御影乳児院は、保育室一室を借りて、乳児と保育士が生活しており、ほとんどの乳児がインフルエンザにかかっており、健康面で心配のない乳児は1～2名のみであったと記されている。また信愛学園でも同様にインフルエンザにかかっている児童が多かったようだ。

1月24日には、愛信学園(兵庫区馬場町)を巡回診療しているが、ここでもインフルエンザが流行っていた。翌25日、御影乳児院の生後1ヶ月の乳児に発熱による緊急入院が必要と判断している。1月26日は、午前には神戸少年の町(垂水区塩屋町)、午後には友生養護学校(現友生特別支援学校)在籍児童の自宅を訪問しているが、当時の市街地は大混乱の状態にあり、倒壊家屋が道を塞ぎ、瓦礫のなか交通渋滞も著しく、移動にかなりの時間を要している。筆者も1月17日大震災当日、西区から勤務先の長田区まで自家用車で出勤したものの、普段なら50分程度で着く距離のところ、7時間強かかったと記憶している。翌18日には、自宅から自転車に乗せて出勤し、以後、児童の安否確認等の移動手段は自転車で行った経験が

ある。

道路の破損だけでなく、ガソリンの確保が難しかったことも一因としてあり、自動車より、ミニバイク・自転車のほうが移動には便利であった。

このような巡回チームの活動の結果、インフルエンザ等の症状は次第に落ち着きをみせ、1月27日をもって、小児科医療チームの救急・救援活動を終了している。

8. 明星寮から学ぶもの

① 避難訓練の成果

職員の話では、震災前までの避難訓練は、児童にとって「またか」という緊張感のないものだったらしい。それでも職員は、そのつど真面目に取り組むよう叱咤していたとのこと。地震発生直後、全員怪我なく無事避難できたことは、避難訓練の成果だったと、当直勤務の職員は回顧されている。日頃は職員に反抗的な児童も、危機に直面すれば、どう行動するのか、誰を頼りにするのか、とっさの判断はつくようになっていた。

② みんなは家族

長田こどもホームを訪問すると、事務所棟の2階にパネル展示がある。震災10周年復興記念行事で作られたものである。その中の一つに、平成7年12月4日付の神戸新聞切り抜き記事パネルがある。見出しは「『36人家族』再び一つに」となっている。

18歳を迎え、退寮していった人がいるため、人数は少なくなっているが、「全壊の明星寮長田に復活」、「クリスマス前のプレゼント」、「職員奔走、完成練り上げ」等の文字が並ぶ。

当時の有本施設長は、この記事の中で、「子どもたちは、二度の別れを体験することになり、今いる施設を離れるのは嫌、と泣く子がいるかもしれない。職員皆でフォローしていきたい」それが「多くの方に支援していただいた恩返しになると思う」と語っている^(注13)。

③ 理念と基本方針から

先に触れたことの再確認であるが、長田こどもホームの理念は、子どもにとって何が大切かを第一に考える支援である。基本方針の一つに、子どもが安心安全に過ごせる居場所づくりがある。また、地域から信頼され、地域支援の一翼を担える施設づくり、人材育成がある。施設再建への取り組みを見ると、まさにこの理念や基本方針を立派に具現させたものだったと評価できる。

おわりに

阪神・淡路大震災時、神戸に多くのマスコミ関係者が取材に訪れた。そして、全国に向かって悲惨な状況を情報発信した。なかには身分を隠して、被災者を装い避難所に潜入し取材活動する者や、ボランティアを装い取材活動を行い、トラブルを起こすポライターもいた。マスコミは美談さがしを競っていた。筆者が当時勤務先の隣接施設で、連絡員待機していると、カメラを持ったあるテレビ局が突然訪れ、単刀直入に「何か美談になるようなものはないか」と尋ねられたことがある。「ここに避難されている方はいません」というと何だと言わんばかりに、そそくさと帰っていった体験である。被害が大きい長田区内を回っているようだった。

しかし、明星寮の場合は違った。一時は、受け入れ先の施設に馴染めば、このまま明星寮が無くなってしまふのではという諦めに近いものもあったが、テレビや新聞で取り上げられたことで、視聴者からの励ましや寄付も寄せられ、職員等関係者は再建の意を強くした。繰り返しになるが、もう一度、みんなと一緒に暮らしたい。みんなは、家族だからという思いが突き動かした結果である。

阪神・淡路大震災では、多くの人々が建物の倒壊、家具類の下敷きで亡くなった。以降、建物の耐震化が叫ばれているが、人口が集中している大都市で直下型の地震が発生すれば、住宅密集地帯であった長田区のように、火災が起こらないとも限らない。地震だけでなく台風等の災害から、私たちはどのように身を守るか。施設子ども達だけではなく、地域に住む子ども達やお年寄りを、どのようにすれば無事に避難誘導することができるか。地域住民一人ひとりが出来る事は何か、そしてそれが実際、災害時に行動に移せるか、常に問いかける必要がある。

謝 辞

本論を取り組むにあたって、社会福祉法人明星寮の現理事長、ならびに震災当時、主任保育士としてテレビ報道にも登場した現理事のご理解の下、長田こどもホームの現施設長、地震発生当日宿直勤務の先生から、資料提供や貴重なお話をお伺いした。

地震発生直後、子どもたちを寮庭に避難誘導させた先生の「もしあの地震で子どもが一人でも亡くなっていれば、私は仕事を辞めていただろう。」と言われた言葉は、非常に重いものがある。その思いを、うまく語り継ぐことができなかつたのは、偏に筆者の力量不足によるものである。改めて、関係者の皆様に深く感謝申し上げたい。

引用・参考文献

(注1) 長田こどもホーム ホームページ

<http://nagatakodomohome.o.oo7.jp/>

(2016年9月2日閲覧)

(注2) 前掲ホームページ

(注3) 前掲ホームページ

(注4) 社会福祉法人明星寮「養護施設 明星寮 (阪神・淡路大震災－被災から再建まで)」小冊子(1997年) p.2

(注5) 神戸市児童相談所「阪神淡路大震災『神戸市児童こころの相談110番』事業報告 こころのケア研究報告 第2部」(1996年)「児童相談所の1年」p.5

(注6) 前掲書

(注7) 社会福祉法人明星寮「養護施設明星寮災害復旧事業概要」(1998年9月)

(注8) 服部祥子・山田富美雄(編)「阪神・淡路大震災と子どもの心身～災害・トラウマ・ストレス～」名古屋大学出版会(1999年) pp.231～234

(注9) 前掲書

(注10) 社会福祉法人明星寮「養護施設 明星寮 (阪神・淡路大震災－被災から再建まで)」小冊子(1997年) pp.4～8

(注11) 阪神・淡路大震災神戸市災害対策本部「阪神・淡路大震災 神戸市の記録1995年」(1996年)「第2部第9節 医療・福祉施設の被害」pp.146～154

(注12) 神戸市児童相談所「阪神淡路大震災『神戸市児童こころの相談110番』事業報告 こころのケア研究報告 第2部」(1996年)「児童相談所の活動状況」pp.22～24

(注13) 神戸新聞記事(1995年12月4日)